

チャイコフスキーの子ども時代 ー発達期における心的体験の痕跡をめぐってー

広瀬 信雄* ・ 長谷部 覚** ・ 手塚 知子***

I. はじめに

ピョートル・イリッチ・チャイコフスキー（Пётр Ильич Чайковский, 1840 - 93）の人生は著名な音楽家ルビンシュテイン兄弟と深く関係している。1865年、チャイコフスキーは、務めていた法務省文官としての職を捨て帝都ペテルブルクの音楽院を卒業しようとしていた。院長アントン・ルビンシュテイン（1829 - 94兄）のもとにモスクワから弟ニコライ・ルビンシュテイン（1835 - 81）が、自分の開設したばかりのモスクワ音楽院の教師を探しに来ていた。

兄アントンはペテルブルク音楽院の卒業生 G・クロスと P・チャイコフスキーの二人を候補者として推薦していた。弟ニコライ・ルビンシュテインは二人に面談し、熟慮の上チャイコフスキーをモスクワ音楽院の教師として採用することにしたのであった。以後のチャイコフスキーの作曲家、音楽家としての人生はよく知られているところである。著名な音楽家兄弟アントンとニコライとの出会いや師弟関係、そして確執や別れについては多くの伝記によって知ることができよう。^{1), 2), 6), 7)}

しかし伝記において世界的に著名な音楽家チャイコフスキーも、その子ども時代については多くのページが与えられず、あまり詳しく触れられていない。逸話が多いが、その謎めいた死とともに子ども時代はベールにつつまれているといえる。

一般に偉大な芸術家の伝記からは時として、その教育の影響が浮きぼりになる。本稿では決して多いとは言えない情報から作曲家チャイコフスキーの子ども時代に焦点をあわせ、知られうる養育・教育情報から、その後の人生に投げかけた影響について検討を試みる。

子ども時代に受けた心的体験や養育が、芸術家の創作活動へ何らかの影響を与えることについては、いわゆる病跡学的なアプローチを引き合いに出すことが自然であろう。

* 山梨大学教育人間科学部障害児教育講座

** 山梨県立甲府支援学校

*** 帝京学園短期大学

Ⅱ．創作と病跡学

いわゆる偉人の生涯において、あるいは天才的な創造において、その影に病跡を見出すとする立場がある。最近では、エジソンやアインシュタインがLDであったとするやや誇張された記述も見られる。音楽家や作曲家においても、このような病跡学的な視点は成立すると考えられるが、その病気や障害が直接後の創作に影響を与えているという根拠を見出すことは困難であり、それはいささか乱暴なアプローチといえよう。

ここで、チャイコフスキーおよびその周辺に関わりのある先行研究について述べておこう。

朝井（2001）は、「ロシア・クラシック音楽の病跡から」と題し、大作曲家チャイコフスキーをはじめ極めて多くの優れた作曲家や名演奏家が、帝政ロシア、ソビエト、現代ロシアを通じて輩出されたことに着目し、「名実ともにクラシック音楽界を代表する国の一つである」としている。さらにこの国におけるクラシック音楽の「驚異的」発展の背景として、音楽への政治的な取り組み、音楽院を中心とした専門的な音楽教育の徹底、そして国民が個々に有している音楽への親和性をあげている。³⁾

さらに朝井（前掲）によれば、ロシア・クラシック音楽の病跡学的な検討の対象としてショスタコーヴィチ（1906 - 75）、ラフマニノフ（1873 - 1943）、ホロヴィツ（1903 - 89）らについて压制下における心理状況、抑うつ神経症と音楽との関係、つまり作曲や演奏に認められる創造と病理の「ともに支え合うかのような関係」³⁾が指摘されている。病理現象の下に創造過程が隠れているのではないか、逆の言い方をすれば、病が思考や創造に変わり、病そのものが消える現象については、これまで病跡学が主張してきた点であるが、いわゆる創造の苦しみ（産みの苦しみ）の過程は、作品ができあがる過程であると同時に、病のエネルギーがその出口を見出し作品を生み出す力に換わる過程なのであろう。

チャイコフスキーに関して朝井（前掲）は、それまで他のクラシック音楽のジャンルに比べて軽視されてきたバレエがロシアにおいて芸術としての地位を得たことの貢献を指摘しているにとどまっている。しかし、音楽家はまさに音楽に囚われていて、その音楽への囚われなしには「音楽家としての自己の音楽の確立のための生涯にわたる努力は不可能と考えられる」という指摘はチャイコフスキーの場合にもよく当てはまっている。「そして何らかの危機的状況に際して、浮かび上がるのは、自己の音楽性に対する無力感が前景となった抑うつ状態ではないだろうか」という指摘は音楽への囚われという病理がさらなる音楽創造を推し進める力となる可能性を秘めていると考えさせる。

長谷部（2009, 2010）は、障害と芸術、とりわけ障害と音楽についてその関係性をピアノニズムの世界に求めている。「不安を抱える音楽家」とっては「障害がありながらも十分な演奏をする」ことや、心の病と芸術との関連を扱う病跡学は、研究方法として「希望を含んでいる」と指摘し、特に精神障害に関してとりあげられることの多い作曲家でピアニストのスクリャービン（1872 - 1915, ロシア）の分析を試みている。スクリャービンは、

いわゆる神秘和音や前衛性から、「精神的に異常である」と言われる反面、多くのファンを有していた。子どもの頃からの「虚弱体質」への反動から、生涯にわたって自分の健康を気にしすぎる傾向があったとされている。ここでも自分の健康と向き合うことと創作力は無関係でないことが推察される。^{4), 5)}

本稿では、ロシア・クラシック音楽におけるチャイコフスキーの位置を確認しつつ、特に彼の子ども時代の「不安」に焦点をあてる。子ども時代のエピソードを手がかりにして、病理的症状（不安や囚われ、繊細さの、くり返される過敏な症状）が創作のエネルギーに変換していく過程を追うことを目指し、さらに子ども時代の周囲の大人の態度、教育のあり方をめぐってその影響について解明を試みる。すでに幼い頃から示される自分の心と体の特性に、子ども本人がどう向かい、周囲の大人たちがそれをどのように受けとめ、理解したのか、を浮きぼりにすることが本稿の目的である。チャイコフスキーの心の発達史の中に創作との関連性を見出そうとするものである。

Ⅲ. チャイコフスキーの子ども時代

前述したようにチャイコフスキーの伝記において、その子ども時代にはあまり多くのページは割かれてはいない。ここでは、今日に伝えられているエピソードを抽出し、子ども時代を素描する。伝記から知られるチャイコフスキーの子ども時代は大方、次のようなものである。^{1), 6), 7)}

チャイコフスキーは、旧暦4月25日、新暦5月7日、ウラル地方のカムスコ（カム河岸の）・ヴォトキンスク鉱山区で生まれた。鉱山区長をしていた父親は40代半ば、母親は26歳で、チャイコフスキーは元気な子どもであった。冬は長かったが四季に富んだ自然のなかで、仲睦まじい家庭生活を営んでいた。また同じ家には死別などの理由で父の兄の娘、姉の娘が家族の一員として暮らし、多くの使用人たちも住んでいたとのことである。チャイコフスキーの母親は父親からすれば後妻であったが、音楽好きで上品で優しく、気配りを絶やさないと、誰からも好かれていたという。

1844年の7月母親が所用で兄（長男）を連れて帝都ペテルブルクに旅立ってしばらく会えないとき、幼いチャイコフスキーは妹とともに「私たちのママはペテルブルクに」という自作の歌をしきりに歌っていたと、父親が母親に送った手紙に書かれていた。家族や自分の悲しみの支えと慰めを幼いうちから音楽にしていたことがうかがえる。

父親イリヤは勤労生活者の見本であったという。彼が任されたヴォトキンスクの鉱山工場は当時最新の優秀な工場であった。作曲家チャイコフスキーの勤労精神も父親ゆずりといわれている。この父親は音楽マニアであり、鉱山学校でフルートや声楽を自ら担当し、生徒たちに演劇熱を植えつけた。母親は歌、ハープ、ピアノを弾き、当然幼いチャイコフスキーの最初のピアノ教師であった。母が好んだ歌「小夜鳴鳥」をチャイコフスキーは生涯、涙なしには聴けなかったという。さらにつけ加えるならばウラル地方はロシア民謡の

宝庫でもあった。以上が幼いチャイコフスキーの音楽環境であった。

ペテルブルクに滞在していた母親は、子どもたちの家庭教師としてフランス人女性教師、ファンニ・デュルバフを連れて戻ることになる。この家庭教師は日課をつくり、計画的に子どもたちを教育した。チャイコフスキー家の子どもたちに、本を読んでやり、自分の考えを伝えたり、体を動かすことを教え、日曜日には一番優秀だった子どもに、フランスの習慣に従って赤いリボンをつけた。チャイコフスキーは何度もそれをつけてもらったという。家庭教師デュルバフは、厳しくも愛があり、この家の一員になった。幼いチャイコフスキーはこの人に安心感を与えられ、兄たちに混じって教えてもらうことを望んだという。一説によればデュルバフのおかげでチャイコフスキーの幼児時代の神経質さはやわらげられていたという。デュルバフは幼いチャイコフスキーがフランス語やロシア語で記した詩の多くを保存していた。詩のテーマは、故郷、祖国、母などであった。

物心がつく頃まで、音楽好きな家庭にあって、どの音楽もがチャイコフスキーの気になった対象であった。蓄音機（オーケストリーナ）で聴いていたとき、彼は突然大声で泣き出し「音楽がいっぱいすぎる、ぼくの頭から音楽を追い出して！」と叫んだという。少年チャイコフスキーの起こした、いわゆる「音楽の発作」であった。

また次のような逸話もある。ある時、家長である父親が子どものために一生懸命働いているのに、子どもたちは不勉強で父親が気の毒である、と家庭教師が説教をしたところ、チャイコフスキーは突然泣き出し、自分は決して父親の恩を忘れてはいないし、父親を愛していると訴えたという。

デュルバフは子ども時代のチャイコフスキーの、感受性の強さ、極度の熱中ぶり（とりわけ音楽への）を記している。音楽にあまりに熱中することを止めさせようとしてデュルバフはピアノを禁止した。するとチャイコフスキーはピアノの代わりに窓ガラスをたたいて割りケガをしたという。逆にこれが本格的にピアノを学ぶため教師を招くきっかけとなった。

子どもの頃、チャイコフスキーはフランス語をあやつり、詩作を残している。また「ガラスのような子ども」だったという逸話が残されている。それは次のような内容である。

生まれたばかりの子猫たちをチャイコフスキーの使用人が水の入ったバケツに入れて始末しようとする現場で、幼いチャイコフスキーは、まだとてもちっちゃいのにと泣いて訴えた。使用人は、まだ目が見えてないのですと手を伸ばしたがチャイコフスキーは必死で袖をつかんだという。親猫がうるさく鳴いたこともあり、母親や家庭教師がやってきて子猫と親猫を納屋へ運んだ…。

このことは少年に重い心理的外傷をもたらしたとされている。¹⁾

少年チャイコフスキーの「音楽の発作」については多くの伝記で語られている。『音楽家たちの幼年時代』という家庭教師が与えた絵本が大好きで、同じく大好きなメロディを、すでに口にしていた。同時に情緒的な鋭敏さ、病的な興奮や心的印象、頭痛、発作など神経症状も幼い頃から示していた。概して傷つきやすいこの少年に、家族は理解に努め、興

奮や発作を回避しようとしていた。⁶⁾

以上が伝記^{1), 6), 7)}に記されているチャイコフスキーの幼年時代、少年時代の要点である。これらは、父母がやりとりした書簡、本人、兄弟、家庭教師デュルバフらの回想等をもとに著されたものと考えられるが、彼の生まれ故郷はウラルの小都市であり、美しく厳しい自然、森や湖は、後の彼の作品の背景となっていることは多くの人の指摘するところ^{1), 6), 7)}である。

さて、このような地方での、上流的な生活にやがて大きな変化が起こる。

1848年、父親が住み慣れたヴォトキンスク鉱山区長を退職することになったのである。一家は生活の基盤を失い、この町を捨て、モスクワを経て帝都ペテルブルクに移り住む。父親は職を探し、母親は都会生活の煩わしさと闘う日々であった。子どもにとって両親の姿は不幸に思えたに違いない。かつての家庭教師デュルバフに「ヴォトキンスクのことは思い出してはいけない。あの頃のことを考えると泣きたくなる」と手紙に書いたチャイコフスキーは兄ニコライとともに私塾に入れられ、初めて「野蛮な」学校生活を体験することになる。大都市のなかで短期間に粗雑な社会の洗礼を受け、彼の神経は過敏になり、精神的な過緊張の生活は1848年12月麻疹が神経発作も引き起こした。母方の祖父もてんかん様発作を持っていたという。⁶⁾

大都市ペテルブルクでの息苦しい生活と病気は新しいたくさんの印象とともに彼を疲れさせはしたが、その一方で、良い音楽教師との出会いによりピアノの演奏力は伸び、音楽的才能を刺激した。そのうち、父親の仕事の都合で一年間のみ、再びウラルの別の町アラパエフスクで過ごすことになり、しばし幸福の時を過ごす。幼い頃、デュルバフが読んでくれた『音楽家たちの幼年時代』を何度も読み返したという。

大都会に来て病気がちになったせいもあってか、チャイコフスキーは子どもらしさを失い、大人のような気づかいをするようになり、戸外よりも室内を好むようになった。オペラ劇場で自分が興奮してしまうこと、都会の子どもたちの気取った態度が大いに気になったという。ちょっとした身体の不調は長びくようになり、尾を引くようになった。

一方この頃、つまり1850年5月、双子の弟たちモデストとアナトーリーが生まれ、明るい話題もあった。デュルバフへの手紙の中で二人の弟を「地上に降り立ってきた天使のようだ」と書いた。

1850年、さらに大きな変化がチャイコフスキーにふりかかる。母親はペテルブルクの学校事情をよく分からないまま他人の勧めによって、裁判官と法務省の官僚を養成する法律学校に兄とチャイコフスキーを予科から入れることにしたのだった。名のあるこの学校は創立当初（1836）、音楽を重視するなどリベラルな性格であったが、革命サークルとの関係を理由に、軍事教練を取り入れた学校に変質していた。かつて作曲家A. N. セローフ（1820 - 71）や芸術評論家スターソフ（1824 - 1906）らがいた頃は、当時のロシア音楽文化の一つのセンターであったこの法律学校も、チャイコフスキーが入学した頃には、変質

し、彼に最も合わない教育がなされていたのである。

母が父のいるウラルのアラパエフスクに戻るのを見送ったときは悲劇的なことが起こった。秋、ペテルブルク市の境界まで母の馬車を見送ったチャイコフスキーは別れ際、泣きながら興奮状態で馬車に突進しすがりつくも、馬車を止める力はなく引きずられた。奇跡的に助かったが、両手をずっと離さずにいたということである。この別離の場面は、大人になってからもずっと、彼は話すたびに身を震わせ、恐怖におののいていたという。^{1)、6)}

しかし幸いなことに前述したように、ウラルでの父親の仕事は一年間で終わった。一家はペテルブルクに集まったので、全寮制の寄宿学校ではあったが、祝祭日、夏期休暇にチャイコフスキーは家に戻ることができたのであった。

そして1854年、決定的な出来事が生じた。母親がコレラのために若くして死亡したのである。少年から青年になろうとする頃のチャイコフスキーにとって、それがどれくらい痛手であったかは、ことばを必要としないであろう。

9年間法律学校で過ごすことになるが、それまでのチャイコフスキーが直面したことは、父親の退職、一家の移転、帝都の刺激、病気と発作、寮生活、軍事教練、家族との別居、母親との別離と死別、ピアノ、学友であった。そして当然のことながら、ロシアの19世紀半ばまでの歴史、その当時の時代性、社会や政治の不安な状況、地方生活と都市生活の違い、西欧音楽と民族や民謡の差のなかで、チャイコフスキーの芸術が開花していく。またこれらのことが彼の育ちの質や人格形成に大きく影響しないはずはなかった。

法律学校卒業後の人生について簡単に述べておこう。法律学校を卒業した者は、裁判官や法務省の幹部になる道が開けていた。1859年彼は法務省の役人になった。しきたりと形式主義に彼は疲れ、上流階級のサロンでピアノを弾くことに逃げ道を見つけた。やがてその社交界にも煩わしさを感じ、1862年には生活をすっかり変えることになる。法務省の役人を辞め、開設されたばかりのペテルブルク音楽院に入る。そこで、音楽院の創設者アントン・ルビンシュテイン（兄）と出会うのである。

IV. 発達期におけるチャイコフスキーの心的体験の意味

一般に多くの人にとって子ども時代の体験は重大であり、それを抱えながら大人へと成長していく。たいていの人にとって、子ども時代に味わった痛手や喜びは一定の範囲内にある限り、それを通過し、のりこえることによって今の自分が形成されたのだ、と後から感じるができる。

一方、深刻な事件がトラウマとなって後の人格形成に悲劇的な痕跡を残す事実も、最近ではPTSDシンドロームとして知られている。犯罪や大災害に巻き込まれた子どもたちにとって、それはけっして「自分を成長させた」事件などではなく、常に頭から離れない、時間とともに軽減されていかない痕跡を残す。それは不安、恐怖、睡眠障害、感情麻痺、過覚醒症状など長期の精神症状を引き起こすことが多い。

チャイコフスキーは著名な作曲家になってからも、幼い頃に味わった悲しみ（例えば母親との一時的な別離）の時のことを思い出し、それを語る際には、身体を震わせ、その当時と同じ感情を味わったようだ、と伝えられている。世界に名前を残す作品を創作したこの大作作曲家にとって彼の子ども時代の心的体験はどのような意味をもっているのだろうか。それは、負の影を落としているのだろうか、それとも創作の推進力と変換したのであろうか、あるいは創作や芸術とは無関係で、誰にもある子ども時代の「思い出」でしかないのであろうか、さらには彼の「人嫌いな性格」「極度のはにかみ」「同性愛への傾斜」「孤独な生活」の直接の原因なのであろうか。

以下では、断片的なチャイコフスキーの子ども時代の心的体験に関する情報をいくつかの視点から見つめ、上述の諸点について言及したい。

よく知られているように、雄大で力強ささえ感じさせる多くの作品群とはちがひ、彼は繊細で内気な人間であった。間違った結婚を解消するため自ら命を落とすことさえ考えた。そのような人間がなぜ世界中の人々が愛する偉大な作品を残せるのか。この点に関しては、作品論、作品分析が必要であろう。それは音楽評論家や音楽学者の仕事であり、広範な作品群を本稿で行う力量を筆者は持ち合わせていない。ここではチャイコフスキーの子ども時代の痕跡をその後の生き方に求め、育ちや学びの意味について問いかけることにとどめたい。

1. 子どもらしい情熱と繊細な気持ち

この時代、上流に属する家ではその子どもたちに家庭教師を招いて住ませ、教育を行った。つまり今でいうような公教育は整備されておらず、とりわけ地方に赴任した旧貴族の流れを汲む家では家庭内で教育が行われた。兄たちが受けている勉強にチャイコフスキーも夢中になった。物事に熱中する傾向はすでに幼い頃に見られていた。

家庭教師の言うことに従い、決められたことを誠実に守り、よい子であろうとする気持ちが強い子どもであった。大人たちのことばを信じ、子どもながらに「善」であろうとした。親や大人、そして自分の家庭教師の期待に応えようとする、誰でもが持っている子どもらしい気持ちをチャイコフスキーも持っていた。平和で暖かな、互いに人を思いやる家庭環境があったからこそであろう。自分より他人の思いを大切にしよう、他人の喜ぶことを自分はしよう、という素直なやや大人びたチャイコフスキーの幼年時代を思い浮かべることができる。

2. 過敏な感覚と勤勉さ

チャイコフスキーの「音楽的（聴覚的）な過敏さ」や「感情への過敏さ」がすでに少年時代から示されていたことが見え隠れする。一つ一つの音が彼の耳に入り込みすぎて、そ

れを自分でコントロールし難い「音楽的（聴覚的）な過敏さ」が彼をますます、「ガラスのような少年」の姿にしていたのであろう。また他者のやさしさ、愛情を感じるとともに、周囲の悲しみや苦しみといった感情をまるで自己の感情のように受け取ってしまう「感情への過敏さ」は、チャイコフスキーの音楽を情緒性豊かなものにする一方で、自分自身を苦しめ、孤独な生活に追いやった過敏さであったと考えられる。

こうした彼の感覚の過敏さには、一つの光景にしても、一つのメロディやことばにしても、彼にとってはより豊かに生き生きと別の意味をもって感じることにつながったのではないと思われる。しかし、その過敏さゆえの生きづらさといったものが彼の生涯についてまわったことも事実だろう。彼のエネルギーが音楽創りへ向かうことによって、持ち前の勤勉さも加わり、作品への評価が生まれた。自分が社会にとって必要とされる存在と感ずることができたのだった。過敏な感覚は孤独であることを求めたが、音楽創りへの志向と勤勉さは、彼の社会的な存在を形成することができたのであった。

3. 弱さ、過敏さをのりこえる創作力

これまで述べてきた幼少年期の「心の大事件」はチャイコフスキーを徹底的に打ちのめし、立ち上がることを不可能にし、どうしようもない廃人状態にしてしまったのだろうか。回復不能な失意の状態に陥れたままだったのだろうか。否、である。

決してそうではなかった。そこには並行していつも音楽へのとめどもないあこがれがあり、音楽を志向する力が、チャイコフスキーの過敏さや傷の受けやすさから彼を救い出す心のエネルギーになっていたのではないか。記述からわかるように、子どものうちから音楽家になることを目指していたわけではなかった。エリートとして法律学校を卒業し、法務省での役人としての勤めをしているうち、自分の道をはっきりと見たのであった。

心の痛手に耐える力は、音楽芸術を極める道に向かっていった。演奏や作曲に没頭、心酔、沈溺してしまう方向ではなく、これから極めるべき目標を音楽芸術に求めることこそが自分の道であると、遠回りをしながらチャイコフスキーは発見したのであった。それは苦悩からの脱皮ではなく、心の事件を起こした痛手をのりこえようとチャイコフスキー自身の心の力が起こした前向きの創造する力であった。

V. おわりに

チャイコフスキーが本格的に音楽を学び直したのは法務省を辞職してからであった。やがて冒頭で述べたようにモスクワ音楽院の教官としてスカウトされることになるが、それから彼の人生は、心の痛手がついてまわった。それは失恋、結婚生活の失敗、自殺未遂、引きこもりとして語られている。彼の最後の交響曲第六番が「悲愴」と呼ばれるようになったのは非常に象徴的であろう。

個々の作品と彼の子ども時代の関係、作品群に見られる心的背景についての分析は今後の研究に待ちたいが、これまでの多くの作品解説や評論によってある程度知ることができよう。個々の作品やその創作の過程にチャイコフスキーの子ども時代がどのように反映しているのか、作品論の再検討をすることによって、心の痛手と創作力の関係を明らかにすることが今後の課題である。

文献

- 1) Шух М. (2009) Чаковский. Пикантные подробности.
Северо - Запад Пресс. Санкт - Петербург.
- 2) Лащенко С.К. (2002) Музыкальная жизнь Москвы второй половины XIX столетия Изд. Театральный институт им. Б.В.Щукина Москва.
- 3) 朝井知 (2001) ロシア・クラシック音楽の病跡から－音楽性の病理－. 臨床精神医学, 増刊号, 248 - 251.
- 4) 長谷部覚 (2009) 左手の演奏家研究序説－障害と芸術の関係についての検討－. 山梨障害児教育学研究紀要, 3, 48 - 54.
- 5) 長谷部覚 (2010) 芸術と障害－ピアニズムを通しての四肢と精神の障害考－. 山梨大学大学院教育学研究科平成22年度修士論文（未公刊）.
- 6) クーニン著, 川岸貞一郎訳 (2002) チャイコフスキー. 新読書社.
- 7) 寺西春雄 (1987) チャイコフスキー. 音楽之友社.
- 8) ヴィゴツキー著, 広瀬信雄訳 (2002) 子どもの想像力と創造. 新読書社.